
CORD 0

杜屋 光

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C O R D O

【Nコード】

N 0 5 2 3 R

【作者名】

杜屋 光

【あらすじ】

二XXX年

全てのネットワークシステムをシャットダウンさせる人間型ウイルスコード『0』が開発された。

ウイルスコード『0』は束の間にネットワークをシャットダウンさせ、経済を崩壊し、世界を壊滅状態にまで陥れた。

しかし、国際政府機関『アジエスタ』の発足と共に研究機関は壊滅。全てが終わったかのように見えた。

だが、アジエスタが研究機関に突入した頃にはウイルスコードは逃

亡していた。

時は遡り二〇一一年

落ちこぼれの少年の前に現れたのは……

！ 未来と現代を舞台にし、悲劇の運命を打ち破る少年の戦いが始まる

序章 ウイルスコード『0』

――報告書――

二〇〇〇年某月某日 黒田研究機関はあらゆるネットワークをシヤットダウンする事が可能な
ウイルスコード『0』の開発に成功。

ウイルスコードの効果は絶大であり、次々にネットワークを壊滅させ、各国の経済を攪乱、
崩壊させた。

翌月 日本を中心に国際政府機関『アジェスタ』を発足。

同月 黒田研究機関の全機能を停止。

アジェスタの投入により研究機関の壊滅に成功。

しかしウイルスコードは見つからず、開発責任者の黒田博士の自殺と共に事件は迷宮入り
し、現在も捜査中。

なお、経済崩壊による恐慌状態が今もなお続いており、諸国では戦争、冷戦、地域紛争が
勃発している。

「……ふう」

アジエスタ本部。

その広大な本部の小さな喫煙室でアジエスタ第一班隊長の天野
一樹^{いっき}は煙草を吸いながら報告書に目を通していた。

『コード0事件』

世界のネットワークを壊滅させた結果、経済を壊滅させ、世界中
で戦争の引き金となつてい
るこの事件。

しかし、ウイルスコードの消失と共に未解決となっている事件で
もある。

「たった一つのウイルスコードで世界崩壊か……脆いものだな」

彼はこの事件の捜査の中心人物だ。

だが、彼は報告書に目を通す度に呆れて返ってしまう。

何度も言うが、ネットワークの崩壊と共に経済は崩壊した。つま
り、人間は機械に頼りきり、
もう機械を手放す事は不可能だという事を示している。

そんな現状に、天野はうんざりしていたのだ。

「アナログの重要性というやつだろうか……」

全てがデジタルの時代。

だが、その進化の元にはアナログという物がある。
だからこそ、彼はアナログは大切だと考えている。

天野は携帯電話やパソコンは操作出来るものの、プレゼンテーションでは企画書を作成し、
今でも通勤前に新聞紙を読んでいるのだ。

アナログの恩恵を忘れないために。

「隊長、そろそろ捜査会議です」

「ん？ ああ、今すぐ行く」

アジエスタの隊員に呼ばれ、天野は吸っていた煙草の吸い殻を灰皿の上で潰し、喫煙室を出る。

会議の内容は勿論、『コード0事件』の事で間違いないだろう。

第一章 落ちこぼれの少年

時は遡り、二〇一一年。

「ふう……この辺で大丈夫か」

あま たかける
数多翔は町の裏通りの一角で少しだけ痛む腕を庇う様にして立っていた。

彼の下で倒れているのは敗者。つまり彼と喧嘩して負けた者達だ。

その数五人。

高校生の喧嘩は大抵一対一が基本で、それ以上は逃げるか不意打ちを使ってどうにか倒すかというのがセオリーだ。

しかし彼は違う。

逃げる事もなく、不意打ちをする事もなく、ただ真正面から突っ込んだ結果がこうだったのだ。

数多には特別力があるわけでもなく、かと言って運動神経が優れているわけでもない。

どちらにしても並大抵の高校生の能力しか持っていない。

ただし、動体視力に関しては普通の人間の数倍を超えており、モデルガンから発射された弾がハッキリと見えてしまうほどに優れていた。

生まれ持っていた特殊な能力。

それを武器に戦った結果がこれだったのだ。

「それにしても今日はやけに冷え込んでんな……ラーメン……カツ
プ麺でも買って食うか」

数多はとつさに財布を確認したが、残金は僅かに二〇円。
これではカップラーメンなど買えるはずもない。

「あと一五〇円くらい落ちてねえかな」

数多は敗北者に目もくれない。

一五〇円くらいなら目の前で倒れている者達の財布から抜き取る
のは容易い事だ。

だが、彼は売られた喧嘩を買っただけ。それ以上の事は決してし
ない。

「おっ！一〇〇円あるじゃん！」

数メートル先、何か光る物が見えるが、この位置からではそれが
一〇〇円であるかなど明確に見分けがつかない。

しかし彼にはハッキリと一〇〇円であると見えている。これは彼
の視力が優れている事を示している。

数多は倒れている敗者達を避けながら、落ちている一〇〇円を拾
い上げる。

「これでギリギリ小さいのくらいなら買えるな」

しかし彼は自らの腹の減り具合を確かめる。

絶対に足りない、そんな自信がある。

「かと言って、お金なんてそうそう転がってたりなんかしないよな」

溜息混じりに彼は呟き、それでも左右を見回しながら裏通りを跡にする。

表通りに出て来た数多は、コンビニに向かう途中、やはり地面を見回しながら歩いていた。

「おお、数多殿ではありませんか」

不意に声は聞こえたので、数多はとっさに声のした方向を見てみると、

「お、西織か」

にしおりしんじ
西織慎司。黒い学生服を着て、茶色い髪をした彼は一見不良に見えるが、実はそうではない。

「ところで数多殿、一つ相談なのでござるが……」
「何だ？」

「数多殿はロリ派でござるか？それともお姉さま派でござるか？」

所謂オタクである西織はかなり真剣な表情で尋ねてくる。

「そうだな……俺だったらお姉さま派だな」

「なるほど、数多殿はやはりそうでござるか。いや、大した事ではございませぬ。ただ少し気になってみたので聞いてみただけでございます」

西織は軽い調子で笑ったが、背後に何かを隠したのを数多は見た。だが、彼はそこに敢えて触れようとせず、

「そうだ西織、あと五〇円ほど貸してくれないか？」
「五〇円でござるか？良いでござるよ」

西織は何の抵抗もなく、数多に五〇円を渡す。

「サンキューな西織！」

「いえいえ、数多殿からの御恩に比べるとこんなちっぽけな事でござる」

過去に西織はその容姿から不良に喧嘩を売られた事がある。だが、不良でない西織は喧嘩が弱く、袋叩きにされていたところを数多が助け出したのだ。

「あんなの大した事でもねえよ」

「いやいや、あれは英雄でござった。もし自分が女の子だったら一目惚れ間違いなしでござる」

「ありがとよ。じゃあまたな西織、ギャルゲーのし過ぎには気をつけろよ。熱中したらなかなか寝れねえからな」

そう言って、数多は西織に手を振って走って行く。

「……流石は数多殿。ばれておりましたか」

西織は背後に隠した物を見ながら、呟く。

「やはり、彼は本物でござるな」

第二章 『ゼロ』という名の少女

ピーー、という甲高い音を出してやかんは湯が沸いた事を知らせてくれる。

「おっ、沸いたな」

キッチンの椅子で携帯電話を扱っていた数多は^{あまた}ポケットにそれを突っ込み、やかんを手にとってカップラーメンに湯を注ぐ。

あとは三分間待つてやっと食べる事が可能になる。

なんて便利なんだろうかと数多は考えながら、カップラーメンを持ってキッチンからカーペットの敷かれている狭いリビングへ移動する。

リビングには木製のテーブルやテレビなどと色々と充実している。逆に言えば、家具が充実し過ぎてリビングが狭くなってしまっているのだが、当の本人は狭い事を余り気にしていないので大丈夫なのだろう。

数多は木製のテーブルの上に湯の入ったカップラーメンを置き、残り時間を計る。

「あと一分か」

空腹の彼にとって、たった一分とて長く感じる。

小刻みに時間は過ぎていき、残り五秒になったところで数多はカップラーメンの蓋を手取る。

「二、一、よっしゃいったっきま……」

数多は割り箸を割り、カップラーメンの蓋を外そうとした瞬間、

凄まじい閃光と共に、ガシャーンとテーブルの上から何かが突如落下してきた。

「な、何だってんだ……てか、何だこれ」

食べ頃のカップラーメンは容器から流れ出し、カーペットに垂れてしまう。

幸い、木製のテーブルは破損する事なくその形を保っていた。しかし、数多の目はカップラーメンにも、テーブルにも向いてない。

少年の目が捉えているのは、床に転がっている一人の少女だった。

金色の長髪は腰のところまで伸びており、赤いリボンでまとめられた一房の髪のを束を横から垂らしている。黒を基調とした服とスカートは、ところどころに緑色の線が入っており、サイバーな雰囲気を感じさせるデザインとなっている。

「どこからぶっ飛んで来たんだよ……」

数多は天井を見てみるが、そこには冷たい白いコンクリートが塗られた天井があるだけだった。

「とにかく、事情を聞いてみるとするか」

数多は少女の肩を掴んで揺する。

もしもの事を考え、頭の中に一一九の番号を思い浮かべる。

「う、うん・・・・・・・・はっ！」

すると、少女は勢い良く起き上がり、周囲を観察する様に見渡す。

「タイムスリップには・・・・・・・・とりあえず成功だね。あとは時計をこの時代の時間を合わせて、元の時間はクロノメーターに・・・・・・・・」

「あのさあ・・・・・・・・」

何やら作業中の様だが、数多はそんな事気にも留めず、

「不法侵入だぞ、アンタ」

ピクリと少女の肩が動く。

どうやら、ようやく数多の存在に少女は気がついてくれた様だった。

「不法・・・・・・・・侵入？」

「ああ、このまま警察呼んだら確実にアンタは連行されるぞ」

「れんこう？」

話が噛み合わない。どうやら彼女は連行がどういう意味なのかを知らない様だった。

「つまり警察に連れて行かれる事だ」

「そ、それは勘弁して欲しいかも！」

ようやく話が通じ合い、少女は焦り始める。

「だったらまずここに何しに来たのかとか、そんな事を明確にだな・
.....」

数多が少女の素性を尋ねようとした時、どこからか腹の鳴る音が聞こえ、彼は途中で言葉を止める。

「はあ.....お腹減ったなあ」

音の発生源は少女だった。

そつえばと思い、数多は自分の腹を気にする。
空腹。

さっきの騒動で夕食になるはずだったカップラーメンは無惨にも零れてカーペットに広がっている。

「あのさ.....」

「は、はい.....」

小刻みに震えながら、少女は彼の冷たい目を見る。

「俺は今からコンビニ行ってくるから、アンタはそのカーペットを片付けておいてくれ」

「えっ？」

少年からの急な要望に、彼女はまた他の焦りを覚える。

「で、でも警察に.....」

「んなことは後回しだ。アンタも腹減ってるだろ？俺も夕食が無くなっちまったから腹減ってるんだ」

「無くなつた？・・・あつ」

少女はカーペットの酷い惨状を見てからようやく気づく。

「ごめんなさい」

「なっちまつたもんは仕方ない。じゃあ後片付け頼むぞ」

「う、うん」

数多は財布と通帳を手に持つと、部屋の扉を閉め、コンビニへと向かう。

「うおっ！さむっ！！」

暗くなつた町はより一層冷え込み、彼はなるべく速く戻ろうと自然と小走りになっていた。

一方その頃、少女は少年から言われた通りカーペットを外して洗濯しているところだった。

「洗剤を入れて、スタートっ」と

次々と手慣れた様に彼女は洗剤を適量入れてからボタンを押す。すると、消音機能の付いた洗濯機は回り始め、その間彼女はカー

ペットのないリビングの床に座っていた。

「早くご飯が食べたいなあ〜」

彼女は上機嫌だった。

人と触れ合うことが、こんなにも温かいものだということを初めて知ったからだ。

今までには、こんな事は決して無かった。

なぜなら、彼女は今まで『人』としてではなく、

『道具』として使われていたのだから。

「ただいま」

扉が開く音がし、数多は寒さに震えながら二人分の弁当を手にとっていた。

「お帰りなさあ〜い」

「……………いつの間にかこの住人になったな」

「あつ……………ごめんなさい」

彼女はしょんぼりと俯いて、自分の立場をわきまえる。

「嘘だようそ。ちょっとからかってみただけだ。さてと、冷めないうちに食うぞ」

「えっ……………あつ、うん！」

割り箸を割り、ちよつと遅めの夕食となる。

「そういえばよお、名前聞いてなかったな。何て言うんだ？」

「ゼロだよ」

「ゼロ？変わった名前だな」

「そうなのかな？ところであなたは？」

「数多^{かげる}翔、数字の数に多いであまただ」

彼は揚げ物にソースを掛けながら答える。

「へえ、珍しい名前だね。今まで聞いたことないよ」

ゼロは魚のフライを箸で串刺しにし、口に運んでいく。

「そういえば……さっきから気になってたんだけど、箸の使い方おかしいぞ」

「そう？わたしはずっとこうやって使ってきたんだけど……」

「違う。全くなってるない。こうやってだな……」

数多はゼロに箸の握り方のレクチャー始める。

細かい部分にも気を遣うのが彼の性である。

それから一時間かけて（内三〇分は箸の握り方のレクチャーだが）

夕食を食べ終えた二人は、食後の休憩を取っていた。

「そつえば、さっきタイムスリップがどうかこうとか言ってたけど、あれは何なんだ？」

数多は思い出す。

先程、閃光と共にゼロは突如現れ、確かにタイムスリップなどと言っていた。

「タイムスリップはタイムスリップだよ。時渡りって言った方が良いかな？」

「いや、タイムスリップで大丈夫だ。……へえ、面白いな」

数多は必死で箸の握り方をマスターしようとしているゼロを眺めながら言う。

「あなたは馬鹿にしないの？タイムスリップしたなんて事を聞いて」「はあ？別に馬鹿にすることでもないし、この広い世界それくらいあっても良いんじゃないの？それにそんなのがあった方が面白そうじゃん」

「……今まで会った人とは少し違うかも」

「俺がか？」

「うん」

彼女は大きく首を縦に振ってみせる。

彼女は今まで何万何百もの人々を見てきた訳だが、彼のような何でも受け入れる人と会ったのはこれが初めてだった。

「他とは違う…….か」

数多は思い返す。

実はそんな事を彼は過去に数人の人からも言われた事がある。

（確か西織からも言われたっけかな）

しかし、どこが普通の人と違うのかがいまいち実感出来ない。なので、数多は考えるだけ無駄だと思い、そこで思考する事を放棄した。

「ところで、これからどうするつもりだ？」

「ん？何が？」

「何がって………今晚の宿の話だよ」

「………忘れてた！！」

ゼロは握っていた箸を手元から落とし、木の乾いた様な高い音が部屋に響く。

「ど、どうしよう！お金は持ってないし、野宿用のテントも持っていないよー！！」

一人でパニック状態のゼロをいかにも冷静な目で見ていた数多は、

「仕方ない、俺の布団でも使え。俺は寝袋で寝るからよ」

「へ………？」

全ての動きを止め、ゼロは数多の方を見る。
意外過ぎる言葉に思わず啞然となる。

「どうした？もしかして寝袋の方が良いとか………」
「そうじゃなくて、本当に泊まって良いのって事だよ」

「ああ？今から探しても宿なんてないだろうし、こんなクソ寒い中をを歩くのも嫌だろ？だからよぉ……………」

数多はいかにも面倒臭そうに説明していると、

いきなり、ゼロは数多に向かって抱き着いてきた。

「ありがとう！本当にありがとう！！」

思わずゼロの目からは涙が零れる。

こんなに人に優しくされたのは、おそらく生まれて初めてかもしれない。

この世界にも、こんな人間がいるなんて。

「……………当然の事をしたただけだ」

数多にはなぜ彼女が泣いているのかが分からない。

だけど、彼女を感動させた何かがあるはずだと思い、彼は彼女を受け止めたのだった。

第三章 絶望の境地

「………そんなに行きたいのか？町の観光」

「うん！」

「行っても何も無いと思うのだが」

「つべこべ言わずに行こう行こう！！」

「だあああ！分かったから腕を強引に引っ張るな！！」

ゼロと数多^{あまた}はアパートを出て、（半ば強引に）町の観光をした。

もちろん、提案したのはゼロなのだが、数多にとってはいつもの町並を見て回るだけの散歩程度でしかない。

だが、改めてゆっくり歩いてみると何だか新鮮な光景に見える。

「こんなのかな風景初めてだなあ………」

「やっぱり未来とかでは開発が進んでこんな風景は無いのか？」

数多の何気ない質問に、しかしゼロはなぜか俯いて、

「未来にはこんなに綺麗な自然は無いよ。あるのは荒れ果てた廃墟と砕けたアスファルトの道ばかり………」

「そりゃあ、随分と荒れてんな」

こんな風景もいつかは見納めの時が来るのかと、数多はいかにも平凡な光景を見て思う。

そして、ふと少年の中に新しい疑問が浮かび上がる。

「でもよ、その話を聞く限り未来は豊かになってるって言うより、

むしろ貧困になつてゐる様なイメージがあるんだが、未来つてのは一体どうなつてゐるんだ？」

とつさの彼の質問に、ゼロは顔を逸らそうとする。
そこまで言いたくない事でもあるのか、と数多は首を傾いでいると、

「ちょっと疲れちゃった。その公園で休もうよ」

ゼロの指先には小さな公園がある。

公園と言つても、余つた空間を有効活用するために作られた事を意図する様な場所に、ベンチと滑り台だけがある程の小さな公園だ。

「まあ良いけど」

数多とゼロは小さな公園のベンチに座り、一息吐く。

「未来の事……そんなに聞きたい？」

突然、ゼロは静かな口調で数多に念を押す。

まるで、その先に触れてはいけない何かがある様に。

「もちろん聞きたい」

しかし彼がたじろぐ事はない。ゼロが言う未来が全ての未来という訳ではない。

あくまで未来の一例に過ぎないと彼は思っているからだ。

「・・・・・・・・わたしのいた未来は、世界中で戦争や紛争が絶えない世界。経済は崩れて、毎日の様にギャング達は抗争を続ける。そんな無法者が集まる世界にいたんだよ」

「・・・・・・・・ひでえな」

「酷いどころじゃない・・・・・・・・まるで生きた心地のしない、生き地獄みたいな所だったの」

「・・・・・・・・」

数多が思っているより、現実は一重たかった。

幸福な時代に生きている彼に、生き地獄の苦しさは到底分かるはずもない。

だけど、毎日生きるか死ぬかの戦いを人々は続けている。それだけは幾ら数多でも理解する事が出来た。

ゼロは更に坦々と話を続ける。

「それで、未来をこんな風にしてしまったのは一つの『ウイルスコード』が原因って言われてるの」

「『ウイルスコード』？パソコンとかのあれと同じなのか？」

彼の言うあれとは、コンピュータウイルスの事を示している。

しかし、ゼロは頷く事もなく、かと言って否定もしない。

「確かに似ているけど、それを更に強力にしてなおかつ、見つかりにくくしたのが『ウイルスコード』なんだよ」

「なるほど」

「じゃあ続けるけど、ある日何者かの手によって強力な『ウイルスコード』が開発されたんだ。そして実験の途中に誤って全世界のネットワークを凍結させ、経済を崩壊させてしまった」

それが未来の全貌だと彼女は言う。
たった一つの『ウイルスコード』で世界が混乱する。
背筋が凍る様な恐ろしい話だ。

「……ごめんね。こんな暗い話にしちゃって」
「気にすんな。俺が勝手に持ち掛けたんだ。俺が悪い」

二人の間に心地の悪い沈黙が流れる。
土曜日だというのに、小さな公園には二人だけしかない。

「そろそろ歩くか？」
「うん」

このまま座っていても進展がないと判断した数多は、ゼロを連れ
て再び表通り沿いを歩き始める。両者の歩くスピードは先程より軽
快ではない。

それどころか、数多とゼロの間の距離は自然と開いていく。
二人の顔に笑顔などない。

「あつ！これは数多殿でござらんか！」

この絶望的なタイミングで現れたのは、不良でもないのに茶髪の
少年、西織慎司^{にしおりしんじ}だった。
西織は白いジャケットにダメージジーンズといかにも今頃の少年
の様な格好をしている。

「おや？おやおや？数多殿、隣の女性とはどういう関係で？」
「ああ……友達だな」

「ほほう、ガールフレンドでござるかあ。羨ましいでござるな。お

名前は？」

「ゼロってんだ」

数多の紹介と共に、ゼロは西織に頭を下げる。

「ゼロ殿でござるか。ところで、ゼロ殿は外人でござるか？」

西織は更に話を掘り下げてくる。

絶望の未来を知らない彼には、数多とゼロの気持ちは分からない。分からない方が良いのかもしれない。

「まあ、外人……ではないかな？」

それでも数多は西織のペースに合わせようとする。

彼はただ全てを知らないだけ。

それだけの事なのだから。

「しかしゼロとは少し変わった名前でござるなあ。でも覚えやすそうな名前でござるね」

西織は何かに納得した様に首を縦に振って頷く。

「では、そんな二人のお邪魔虫はさつさと引き下がるべきでござるな」

「いや、何か勘違いしてないかお前」

「では、また学校でお会いしましょうぞ」

「ちよっ！西織！」

良い休日を、と西織は言い残して雑踏の中に消えていく。

「アイツ、谷本にも言うだろうな……月曜が面倒臭そうだ。
たにもと

って！金返してない」

数多は昨日西織から金を借りた事を思い出す。
今から追いつければ間に合うが、ゼロがいる事も考慮して諦める
事にする。

「今のはお友達？」

「ああ、ちよつとした縁があつてな」

「へえ、わたしも友達が欲しいなあ」

「自分から作ろうとしたら何人でも出来るよ」

「よおし、目指せ一〇〇人だね！！」

ゼロは意気込みを入れ、数多に宣言する。

「規模がいきなりでかいな。まあ、頑張れ」

「うん！もちろん、友達第一号は翔かけるだけだね！！」

この時、ゼロは初めて数多の事を名前で呼んだ。

「ありがとよ」

二人に先程までの暗い顔は残っていない。

光が射す町を二人は並んで歩く。

だが、光のある場所には必ず影もある。

その影は少しずつ、そして着実に二人の下へと近づいていた。

第四章 最悪の逃亡

一日中町を歩き回った数多とゼロはやや疲れ気味になって帰路へと着いていた。

冬の日は早く、街灯がちらほらと点灯している。
人の出歩く姿はまったく見当たらない。

今日は今冬最低気温と天気予報では言っていた。そんな中を出歩く人はまずあまりいない。家で暖房の利いた部屋でテレビを見るのが大半だろうと数多は勝手に予想してみる。

「さ、寒い」

そんな中、上着も着ないでぶかぶかのセーターとスカート姿のゼロは震えていた。

元々、彼女の衣服はサイバー風のピッタリと体のラインが出てしまふ服とスカートしかない。さすがに冬にそれで出歩くのはまずいと思った彼女は、数多の了解を得てセーターを借りていた。

ついでにジーンズも借りようとしたが、あまりにも大き過ぎたのでそちらは断念した。

「そんな格好してたら、そりゃ冷えるだろうな」

一方、数多はというと、上着に黒いジャケット、ズボンには青いジーンズを着用しており、防寒の点でもファッションの点でも完璧だった。

「な、なな何か、あた、温かい物が、な、ないと、し、死んじゃう！」

限界を突破したゼロの顔は白い肌がより一層真っ白に変化し、体全体を震わし、会話も十分に出来ない。

「はぁ……ほらよ」

すると、数多は黒いジャケットを脱ぎ、それをゼロに投げ渡す。

「それでも着てろ。でないと凍死するぞ」

「あ、ありがとう」

彼女は早急に黒いジャケットを着て体を温める。

血の気が戻ってくるのが体温の上昇で分かる。

「さて、さっさと帰るぞ。そうだな……今日は鍋にするか」

数多は夕食の事を考えながら次の一步を踏み出そうとすると、隣で歩いていたらゼロが急に立ち止まった。

なぜ止まったのか声を掛けようと数多が口を開こうとして、

「鍋か、ソイツは良いかもしれないな」

突如聞こえた声は、数多の声を制した。

声のした方に振り向くと、そこには戦闘服の様な灰色の迷彩色の服を着用した二五歳前後だと思われる男が暗闇の中から現れた。

「誰だアンタ」

数多がとっさに言い放つと、男は懷から煙草の箱を取り出し、

「ああ、スマン。あまりにも美味そうな話をしていたからな」

男は箱から煙草を一本取り出し、それに火をつけて口にくわえる。

「アジエスタ第一部隊長、あまのいつき天野一樹だ。と言っても、この時代の君には分からないか」

天野は自己紹介を終えると、煙草を吸いはじめる。

アジエスタと言われても、現代人の数多には分からない。ただ、目の前にいる男がこの時代の人間ではない事は分かった。

「んで、そのアジエスタとかいうとこの隊長さんが遙々この時代に何しに来たんだ？」

情報の少ない数多は少しでも相手から情報を引き出すために余裕のある表情で尋ねる。

「はあ、俺が未来人だって事は分かったか。だったら話は早い・・・」

天野は吸い終えた煙草を手放し、それを靴で踏み付けると、

「お前の後ろにいる『それ』を回収する。それが俺のミッションだ」

数多は思わず振り返る。そこにいたのは間違いなくゼロだった。

「どついう事だ」

数多は天野を敵視する。

一方の天野は余裕からか、薄く口元に笑みを浮かべる。

「君には関係ない事だ。だが、これだけは言っておくがその後ろにある『それ』はとても危険なんだ」

何かを隠している様な言い方を天野はする。

危険と言われても、何がどう危険なのが混沌としている。

様々な可能性を数多は頭の中で吟味していると、

「ウイルスコード……………」

小さく呟いたのはゼロだった。

「わたしは……………コードナンバー0。世界を崩壊したウイルスコード」

「なん……………だと？」

数多の思考は途切れ、ゼロの言葉に愕然とする。

ウイルスコード、未来のネットワークを凍結させ、経済を破綻させた最悪の中の最悪。

それが彼女だった。

「その反応……………どうやらウイルスコードが何なのか理解しているようだな。だったら分かるはずだ……………」

天野は懷から輪の様な物を取り出す。
おそらく手錠だろう。

「それは悪魔だ。世界を混乱させた最悪の兵器。俺達はそれを処分する」

「・・・・・・・・させるか」

数多は呟き、ゼロの腕を取る。

それを見て、天野は眉をひそめる。

「何をする気だ？」

「大人しく渡すかよ！！」

叫ぶと同時、数多はゼロを連れ、その場を逃げ出した。

「チツ、大人しく渡せば良いものを・・・・・・・・しょうがねえ、A班は俺と奴らの搜索、B班は奴らの居場所の特定、C班はシャットノイズと磁場ライザーで妨害工作だ！一般人には見つかるな！！」

天野は指示を出し、腰から拳銃を抜く。

彼の背後には数一〇人のアジエスタのエージェントが拳銃を持って立ち並んでいる。

「テメエら、奴らの手足をぶっ飛ばしてでも捕まえるぞ！いいか！！」

エージェント達の団結の声が、静かな町に轟いた。

第五章 未来への活路

「チツ、雨か」

数多^{あまた}とゼロは雨の中、狭い街路を走っていた。

大通りを走るより、このような狭い道を移動した方が確実に見つかりにくくなる。それに、この町には住人しか知らない裏道も多く存在している。

地理の点では数多の方が勝っていた。

「と、とにかく助けを呼ぼう！警察で大丈夫か！？」

数多は携帯電話のボタンをプッシュしようとした時だった。

「な、何だよこれ……………」

携帯の画面を見て、彼は脱力する。

圏外。

裏通りではよくあるが、数多がいるのは家の密集している路地だ。そんな場所で圏外になる事はない。

「多分、磁場^{ジバライザー}発生器のせいだね」

数多の後ろをついて来ていたゼロが彼の携帯画面を見て断言する。

「ジバライザー磁場発生器？」

「特殊な磁場を発生させて電波を妨害する機械だよ。この調子だとシャットノイズ防音音波も使われていそうだね」

ゼロの言っている事を数多は理解出来ないが、とにかくこっちにとつて不利な物である事は理解出来た。

「とにかく逃げ続けるしかないか！」

数多は前後を注意しながら路地を歩いていく。

「いたぞ！」

すると、天野と同じ灰色の迷彩服を着た男がライトで二人を照らし、拳銃を構える。

「コイツら！ゼロ、戻れ！！」

「えっ！う、うん！」

二人は元来た道を走って引き返す。背後から二、三発の銃声が響いたが、そんな事は気にしていられない。
とにかく逃げる。

二人の頭にはこれだけしかなかった。

「ま、撒いたか………」

路地を抜けた二人は後方を確認する。

先程までの銃声は止み、辺りは静まり返っている。

「よし、行こう」

「うん……………」

数多はゼロの腕を引いて車の無い通りを歩く。

「雨……………激しくなってきたね」

気づくと雨は大粒になり、土砂降りとなっていた。

「隣町まで行けば何とかかなりそうだが……………クソッ！」

歩く速度は段々と鈍くなっている事が分かる。

赤いトレーナーには水が染み込み、数多の体温を余計に奪っている。

「だ、大丈夫？寒そうだけど」

「だ、大丈夫……………これくらいな」

体に限界がきている事を感じても、数多は歩き続けようとする。

こんなところで諦めたくない。

その一心だった。

「まだ距離はあるな……………」

無意味に点滅している信号を見て、二人は横断歩道を渡ろうとしたその時、

前方から銃声が聞こえ、弾丸は数多の頬を掠った。

「いつつ……」

数多の頬から赤い液体が一筋流れる。

「外したか」

目の前には先程と同じ様に灰色の迷彩服の男が銃口を数多に向けていた。

「……ちょっと下がってるぜロ」

数多は一步前に踏み出し、ゼロを制する。

「どうするつもりなの……」

「潰す」

売られた喧嘩は必ず買う。例え、相手が政府に認められた機関であつても。

数多は地面を蹴って走り出す。

男との距離は一五メートル前後。

「血迷ったか。ここで仕留める」

男は静かに拳銃を構える。

狙いはあくまで腕か足。殺してはならない。

拳銃の中にあるロックオン機能が、数多の腕を狙ったところで、男はその引き金を引く。

渴いた銃声と共に、弾丸は真っ直ぐに少年の腕に向かっていく。完璧だと男が確信した時、

少年の腕から弾丸は外れていた。

男は息を呑む。

「そんな……」

確実にロックオンし、確かに的を的確に射たはずなのに。
男は引き金を次々と引き、弾丸は連続して発射されるが、一撃たりとも当たる事はない。

ロックオン機能が壊れたのかと疑ったが、実際は数多がその全てを避けていたのだ。

彼の目は普通の人間とは違い、動体視力が数倍も良い。
だが、そんな事も知らずに男は引き金を引く。

「嘘だろ……」

漏れた声と共に聞こえたのは、カチリという弾切れの音だった。
三〇発は装填されているマガジンはすでに空となっていた。

「おい、オッサン」

「はっ！」

気付いた時には少年は眼前にいた。

「相手をよく考えろよ、雑魚」

ゴッ、と少年の一撃が鳩尾に入り男は気を失った。

「よし、これでひとまず大丈夫だ」

数多は歩道に男を寝かせ、ゼロの下へと戻る。

「急ぐぞ！多分ここにいたらいずれはばれちまう」
「うん！」

二人は横断歩道を渡り、再び路地へと入っていく。

「ぐっ！！」

すると突然、数多は地面に倒れてしまった。

「だ、大丈夫！？」

「だいじょう……くっ！」

手足に上手く力が入らない。

ゼロは数多の顔に触れる。

「冷たい……完全に体温が奪われちゃってる」

彼女は周囲を見渡し、屋根がありそうな場所を探す。
しかし、そんな場所はどこにも見当たらない。

「このままじゃ本当に死んじゃうかも……よし」

ゼロは黒いジャケットを脱ぎ、それを数多に着せる。

「とりあえず屋根のある場所に移動するよ。立てる？」
「ああ……」

数多はよろよると何とか立ち上がり、ゼロの補助を借りて歩き始める。

「あつ、あそこがいいかも」

路地の開けた場所には河川敷があり、その上には橋が架かっている。

「あの橋の下にとりあえず隠れるよ!」

「おう……」

二人は橋の下へ向かい、そこで雨宿りをする。

「どうかな?」

ゼロは数多の額にそつと触れる。僅かだが、数多の体には温かさが戻っていた。

「ふう……とりあえずここで万全になるまで待機しようね」

「そうだな」

二人はその場に座り込み、肩を並べる。

なるべく密着した方が体温が逃げにくくなるからだ。

「雨脚……また強くなったね」

「うん」

二人は黙り込み、激しい雨の音だけが聞こえる。

「わたしのせいなのに……」

するとゼロは僅かに口を開き、呟く。

「わたしのせいでこんな事になってるのに……」

自分のせいで大好きな少年が傷付くのが、彼女には何よりも辛かった。

耐えられない苦しみ、心が締め付けられていく。

「おかしいよね……世界を壊した最低最悪のプログラムなのに」

彼女は拳に力を入れ、歯を食いしばり、

「なんでこんなに辛いんだろう」

彼女の目には僅かに透明な涙が浮かんでいた。

「……」

数多はそんな彼女の姿をしばらく見て、

「実はよお、俺って親から捨てられたんだ」

「えっ……」

その言葉に、ゼロは彼の顔に視線を移す。

「俺の目って普通の人間とは少し違うらしいんだ。でもそのせい

で親は俺を施設に入れやがった。普通とは違うって理由だけでな。俺は化け物扱いされたって訳だ」

少年はそれでも苦い顔一つしない。

「だからさ、俺は全てを受け入れる人間になりたいんだ。差別や偏見をしない人間に……な」

「そうなんだ……」

複雑な気持ちがゼロの心を支配する。

辛いのは自分だけではない。隣の少年にだって苦い経験はある。みんなに平等に辛い事はあるのだ。

それなのに、自分だけ辛い事ばかりの様な言い草をしている自分が最低だった。

「俺はお前を化け物扱いしているアイツらを許せない。もし世界を崩壊させたとしても、お前は同じ人間なんだからな」

数多はゼロの頭を強めに撫でる。

普通と認められた。

彼女にはそれが何よりも嬉しい事だった。

「うぐ……ふええ……」

「おいおい、何で泣いてんだよ」

「泣いてなんか……ぐす……ないもん！」

「分かった分かった！分かったからポカポカと俺の頭を殴るな！」

意外に強いパンチを数多が頭に受けていると、

「ん……？おいゼロ、それなんだ？」

「うつつうつつ……えっ？」

数多が指差していたのは、ゼロの赤いリボンで一房にまとめられた髪の下に隠されていた本当に豆粒の様に小さなプラグの様な物だった。

「Uninstallation……なんだこれ？」

英語の知識が鎖国状態の数多は何かスペルをゼロに伝えて翻訳してもらった。

「アンインストールだね……あっ！」

するとゼロは何かを思いついた様に立ち上がった。いや、実際に思いついたから立ち上がったのだ。

「ウイルスアンインストールプログラムだよ！それでわたしの中からウイルスコードを消滅させる事が出来るかも……！」

「マジか……！」

「でも、そのためには未来に行かないと……！」

「お前の力で何とか行けるんじゃないのか？」

数多の言葉に、しかしゼロは首を横に振る。

「わたしの持つて^{トランサー}る通行許可証はここに来る時にエネルギーが切れちゃったの。充電もここでは出来ないし……！」

ト
ラン
サー
通行許可証が何なのか数多には分らないが、どうやら未来に行くには必要だという事は理解できた。

「……そうだ！行くぞゼロ！！」

「えっ！？どこに？」

突然立ち上がり歩き始めた数多にゼロが尋ねると、

「未来から来た奴らがまだいるじゃねえか」

第六章 組織の事情

天野は雨の降る町の中をライトを照らしながら歩いていた。
背後には四人ほどのエージェント達が天野と同じ様にライトを照らしている。

「ん？あれは何だ」

横断歩道の先に倒れている人影を見て、天野はそちらにライトを照らす。

そこには、灰色の迷彩服の男がぐったりと倒れていた。
同じアジエスタのエージェント。

天野達は倒れているエージェントのところまで歩み寄る。

「死んでは……いねえな。気絶してるだけだ」

天野はしゃがんでエージェントの生存を確認すると、次に握られている拳銃のマガジンを確認する。

「全発無くなってやるな……」

アジエスタ第一部隊は戦闘に特化した集団だ。

勿論、集めたエージェントも優秀な者ばかりで、三〇発も弾を使えば必ず相手を仕留める事が可能だ。

だが、このエージェントは三〇発使ってなおかつターゲットに倒されてしまった。

別にこのエージェントが他のエージェントより劣等な訳ではない。
相手が『普通でない』だけだった。

「お前ら、コイツを運んでおけ。奴らの搜索は引き続き俺がする」

天野は立ち上がり、ライトを一旦仕舞って、トランシーバーの様な物を取り出す。

「こちらA班、こちらA班、B班応答せよ」

『ザ……こちらB班』

トランシーバーの様な物からは僅かなノイズと共に声が聞こえる。通常、^{ジバライザー}磁場発生器を使っている時は電子機器のほとんどが使用出来ないのだが、このトランシーバーは特別で、磁場の中にある電磁波を取り込み、それを送受信する事で会話が可能となるものだ。

「ターゲットの居場所を特定できたか？」

『いえ、まだ特定出来ておりません。磁場の影響は余りないので、大雨の影響で察知する事が困難になっております』

「……分かった」

天野はトランシーバーをしまい、再びその手にライトを持つ。

「やはり……この状況では機械は死にならないな」

未来ではデジタルを駆使して搜索や情報交換をしており、アナログ方式の物は一切使っていないのが普通だ。

だが、彼は少し違う。

自分の足で搜索する事を得意とし、機械に余り頼らない。その証拠に、彼の拳銃にはロックオン機能が搭載されていない。

未来では大半の銃器には機械が勝手に狙いを補正してくれる機能がついており、数ミリも狂う事が無く弾丸を発射する事が出来るのだが、彼はわざとその機能を取っ払った。

機械は信用しない。最後まで信用出来るのは己のみ。

「そうだ……お前ら、そいつを運んだ後通信機を持ってきてくれ。
一応本部にも連絡いねえといけないからな」

天野は億劫そうに言うと、エージェントの一人が、

「通信機ならここにあります」

差し出されたのは、形がポータブルミュージックプレイヤーに類似し、それにオーディオセットが取り付けられている物だった。一見簡単な構造であるが、中は複雑であり、これを使って時空を越えてどんな状況下であっても未来と連絡を取ることが出来る。

「手が早いな」

天野は受け取り、オーディオセットを着用して通信機に付いているボタンを押す。

「天野だ。一応現状報告をする」

『こちら紅坂（こうさか）です』

聞こえてきたのは静かな情勢の声だった。
しかし、天野はその声を耳にして舌打ちをする。

「何で第二部隊のお前が応答するんだあ？」

元々、ウイルスコード『0』を追っていたのは第一部隊のみであり、ほかの部隊は関わりを持っていない。

しかし、連絡に回答したのは第一部隊の者ではなく、第二部隊のしかも隊長だった。

『上層部からの命令でこの作戦に第二部隊の導入が決定しました。聞いたところ、現地の第一部隊が苦戦しているそうなので』

「余計なお世話だ」

激しい雨の中で天野は息を吐く。

どうやら相手はこちらの現状を知っている様だった。

『良ければわたし達がバックアップしますが』

「いや、その必要はない」

天野は静かな声で言葉を返す。

『……分かりました。ではわたし達はそのまま待機しています』

その言葉と共に通信は通信は切断された。

天野はオーディオセットを取り外し、それをエージェントの一人に渡す。

「上層部の奴ら……そんなに俺達を信用出来ねえってのか」

クソッ、と彼は吐き捨てる。

彼らはずっとウイルスコードを独自で追いつけてきた。だが、今になってやっと上層部は彼らに応援をつけた。

まるで、彼らはもう不要だと嘲笑う様に。

「……お前ら、早くソイツを連れて行け。俺は奴らをここで仕留める」

「は、はい！」

エージェント達はぐったりと横たわっている同僚を担いで暗闇の中へ消えていく。

「さて、久しぶりの一人での仕事だぜ」

激しい雨の降る大通り。

天野の目先からは二つの足音が徐々に近づいていた。

第七章 雨の中の刺客（1）

一層激しさを増した大雨は、容赦なく数多とゼロに降ってかかる。だが、二人はそれでも走り続けていた。

やっと見つける事の出来た負の連鎖からへの脱出の鍵を逃す訳にはいかない。

「つまり、お前の作られた場所……確か黒田研究所だっけ？そこにウイルスコードのアンインストールデータがあるかもしれないんだな？」

数多は再度確認する様にゼロに尋ねると、ゼロはこくりと首を縦に振った。

「でも完全な情報じゃないからあまり期待は出来ないかも……」
「その時はその時だ。また新しい方法を考えれば良い」

限りなく前向きな目の前を走る少年を、ゼロは何だか眩しいものを見る様な視線で見ていた。

「翔かけのその思考は少し見習う必要があるかも」
「あ？そんな大した思考回路なんて持ってねえよ」

言葉を返すと、ゼロは少し笑っていた。何で笑ってるんだという疑問が彼の頭に一瞬だけ思い浮かんだが、それは本当に瞬間的な出来事だった。

数多の思考は凍りつき、二人の足は止まる。
目の前にいたのは、片手におそらく四五口径はあるだろう大きめの拳銃を持って雨に打たれている灰色の迷彩服を着用した男。

アジエスタ第一部隊隊長、天野^{あまのいつき}一樹だった。

「やっと見つけたぞ逃亡者ども」
「クソッ！」

予想外の展開だった。

数多達が前もって考えていたプランは、一人になった隊員を見つけて不意打ちをし、通行許可証^{トランサー}を奪ってしまおうというものだった。だが、相手は隊長である上に既に見つかってしまった。これでは不意打ちなど出来やしない。

「やらなきゃ……ならねえのか」

数多はゼロを背後に移動させ、拳を力強く握りしめる。
その姿を真っ向から見ていた天野は口元に笑みを浮かべ、

「大したもんだ。この銃を見て逃げようともせず、しかも拳一つで挑もうとするとは。君みたいな隊員が是非欲しいもんだ」

ガシヤリと重い金属の音がし、天野は四五口径の拳銃を数多に向ける。

「……逆に言えば俺みたいな人材が欲しくなるほどアンタの部隊は腐ってるって事だな」

拳銃を向けられているはずの数多は、しかしニヤリと笑って天野を挑発する。普通ならこんな自滅する様な行為は決してしない。

だが、数多には一つの狙いがそこにあった。

それは、必ず自分に向けて発砲させるという事だった。

数多の動体視力をもってすれば、拳銃の弾を何とか避けられない訳でもない。

ただし、ゼロに狙いを定められるとそれが不可能になる。押し倒して守るという方法もあるが、それでは防戦一方になるのが目に見えている。

だから彼は自らが的になり、相手を攻めるといった手をとった。

「言わせておけば……言ってくれるじゃねえか」

天野の目が見開く。

どうやら挑発には成功した様だった。

「ゼロ……伏せておけ。危ない」

「う、うん」

数多は背後にいるゼロに囁く様な声で言うと、ゼロはそれに従い道の端で体を伏せる。

「どいつもコイツも俺達をコケの様に扱いやがって!! テメエみたいなクソガキに俺達下っ端の気持ちなど分かりもしないだろ! 底辺にいる俺達の気持ちがお!!」

怒号と共に四五口径の拳銃からは弾丸が発射される。ジャイロ効果を得て加速する弾丸は真っ直ぐに数多の下へと向かう。

しかし、弾丸が数多に当たる事はない。

数多は弾丸の場所を見極め、それを全て避けている。

だが、三発程度発砲したところで、天野はトリガーを引くのを止める。

「なるほど、さっきの奴が三〇発使って倒せなかった理由が分かった。どうやらお前は弾を避けれるようだな。しかも、目で見て」

数多は黙ったまま天野を見据える。

種がバレてしまったところで焦る必要はない。相手がどんな事をしようとも、弾丸は見える。数多はそれをひたすらに避け続け、相手が弾切れになった瞬間に攻撃すれば良いのだから。

しかし天野は手元にあった四五口径の拳銃を直し、新しい拳銃を取り出す。

先程の四五口径の拳銃よりはスマートに見え、リボルバー回転式であった。

「コイツを使う事になるとはな……まあいいだろう。これくらい楽しい方が愉快で良いからな！」

すると、天野はリボルバー回転式の拳銃のトリガーを引く。

弾丸は先程と全く変わらず、ただ真っ直ぐに数多の方へと向かう。数多もその弾丸を軽々と避けようと体勢を変えようとしたその時、

弾丸は数多の目の前でいきなり止まってしまった。

「なっ!?!」

数多は思わず声を上げてしまう。

弾丸は空気中に止まったまま、一向に動こうとしない。

天野はリボルバー回転式の拳銃を次々に発砲するが、どの弾丸も数多の目の前の空気中で静止してします。

まさかダミーだろうかと数多が考えると、天野は不気味に笑みを

浮かべ、

「アクセル加速開始！」

天野がそう叫んだ瞬間、空気中の弾丸は動きだし、

凄まじい速度で数多のたらだへと突撃した。

「うぐっ！！」

何とかギリギリで回避した数多だったが、弾丸の一つが肩を掠ったため少量の赤い液体がそこから漏れ出す。

「クソ……何なんだあれ」

一度静止した弾丸。

だが、天野が何かを叫ぶと弾丸は動き出し、しかも速度は格段にアップしている。

普通の銃弾が見えるほど優れた動体視力さえ映らないほどの速度。

「翔！」

すると、端で伏せていたゼロが数多の傷付いた姿を見て飛び出してきた。

「血が出てるよ！早く止血しないとー！！」

「これくらい大丈夫だ。それより……お前は伏せておけ」

「嫌だ!!」

数多に向かって、ゼロは力強く叫ぶ。

「このままじゃ……翔が死んじゃう!」

ゼロの目にはクリアな何かが浮かんでいる。

悲しみを含めた、透き通る様に美しい涙。その一滴が雨と重なって地面に落ちる。

「今度はわたしが翔を守る番なんだよ!」

ゼロはまるで数多の盾になるが如く、前へと一歩踏み出す。

「ほほう、罪人同士が底い合いか。シチュエーションとしては悪くないな」

天野は回転式リボルバーの拳銃の銃口を真っ直ぐにゼロに向ける。

「や、やめろゼロ!!」

力の限り数多はゼロを目の前から退かそうとするが、ゼロは足を植物の根の様にしてその場から動こうとしない。

「翔……初めて会った時お弁当をありがとう。ラーメン零しちゃってごめんなさい。町の案内はとても楽しかったよ。そして……」

ゼロは一瞬だけ数多の方に振り返り、

「わたしを認めてくれて、優しくしてくれて本当にありがとう!!」

瞬間、ゼロの体は閃光に包まれ、周囲の電柱がバチバチと一斉に弾ける様な音をたて始める。

「ぜ、ゼロおおおおおおおおお!!!!」

数多は叫ぶが、もうその声は彼女に届いてはいない。

第七章 雨の中の刺客（2）

「クソ！ウイルスコードか！！」

あまの
リボルバー
天野は回転式の拳銃のトリガーを引くが、弾丸は出ない。拳銃の中の弾丸を制御する機能がウイルスコードに侵され、停止してしまっただ。

「やはり機械に頼った俺が馬鹿だったか。ならコイツで仕留める」

リボルバー
回転式の拳銃を直し、取り出したのは先程の四五口径の拳銃だった。

その銃口を静かに彼はゼロに向ける。

「終わりだ化け物」

「そうは……させるかああああああああ！！」

あまた
すると数多は勢い良しにゼロに飛び掛かり、押し倒す。

勿論、弾丸は何かを貫くことなしに空を切って彼方へ飛んでいく。

「チッ！つくづく邪魔しやがって！」

銃口はゼロから数多へと矛先を変え、弾丸が二、三発と発射される。

数多はその弾丸を見極め、水浸しの地面を転がる。冷たいが、今はそれにかまっている暇はない。

目の前の敵を倒し、ゼロのウイルスコードをアンインストールしなければならぬ。

この身が果てても！

「うおおおおおおおおお!!」

数多は決死の思いで立ち上がり、天野へと突っ込む。

「真っ向から勝負か!面白れえ受けて立ってやるぜ!!」

天野は真っ直ぐにヘビーな拳銃の孔を数多に向け、容赦なく五、六発の弾丸をぶっ放す。

一方の数多は弾丸の壁を次々とかわし、右拳に力を込める。

どんどん距離を詰めていき、ついに数多は天野の懐へと潜り込み、腹に一発ボディブローを入れる。

「グフツ!!」

天野の体がくの字に曲がり、後方へとよろめく。

そこへ更に数多のラッシュが続き、天野は防戦一方となってしまう。だが流石は国が認めたエージェントだけあって、天野は数多のラッシュを全てかわし、受け止める。

しばらくラッシュは続くが、数多の体力は無限ではない。

痛恨の一撃を与える事なく、数多は一度引き下がる。

「くっそ……当たんねえ」

荒く息を吐きながら、数多は中腰になる。

動体視力は人より優れている彼でも、体力や素早さは人となんら変わりもない。

よって、その点では毎日鍛えている天野の方が上手だった。

(何か……何かないのか。奴を怯ませる何かが!)

数多はようやく息を整え、次の一撃へと備える。

一方、天野は四五口径の拳銃を数多に向ける。
いかにも冷たい表情で、

「さて、そろそろ終わりにするか。こちらが押しているんだな」

天野はトリガーに指を掛け、正確に数多を狙う。

今の数多は疲労が溜まって上手く動く事が出来ない。どんなに弾丸が見えたとしても、一〇発程度連射すればたちまち彼の体は蜂の巣となるだろう。

だが、それには大きなリスクが科せられる。

四五口径ともなると、撃った反動で肩に衝撃が走り、いくら銃器を扱うのが上手くても肩を外してしまう事がある。

しかも、彼は既に何十発もの弾丸を発砲しており、肩には強大な負担が掛り、今に壊れてもおかしくはなかった。

彼にとっては大きな賭け引きだ。

自分の体が崩れるか、自分のプライドが崩れるかの大勝負。

「俺は必ず認められる……泥を吸ってでも、草を食んでも、俺は俺の道を開く！」

カチリと渴いた金属音がし、既にセーフティの外された四五口径の拳銃からは、

何も出てこなかった。

天野は驚愕し、そしてそれは動揺へと変貌する。

「く、クソ！マガジンが！」

マガジンの中は空になっていた。

天野は慌てて換えのマガジンを装填しようとするが、手が震えてなかなか作業が成り立たない。

どうした！俺は俺の道を開くんだ！こんなところで怯んでいる暇など……。

「……へっ。誰が自分の道を開くってんだ。ジョークがクソ過ぎて笑えも出来ねえぜ」

少年の声によつて、天野の思考は遮られる。

数多はよろよと安定しない足取りで天野の方へ歩く。

「誰が自分の道を開くだってえ？組織なんかに束縛されてるテメエが言える事じゃねえんだよそんな事は」

ゆっくりと、ゆっくりと少年と天野の距離はなくなっていく。

「俺はなあ、親から捨てられてずっと自分の道だけ進んでたんだ。

その結果、毎日の様に裏通りで喧嘩して、毎日心を削って生活してたんだ。知らず知らずに感情は薄れ、何が楽しくて、何が悲しくて、何が嬉しくて、何が腹立つかが分からなくなっていた」

だがな、と少年は右手一杯に力拳を作り、

「俺はゼロと出会って何かが変わったんだ。今悲しいのはアイツが俺の為に犠牲になった事、今腹立つのはテメエみたいなクソ野郎が

劣等感を堂々と語っている事だつてな！！」

握りしめた拳は限界にまで引かれ、曲線の軌跡を描いて放たれる。

[illegible]

メリツという音をたて、数多の拳が天野の頬へと沈んでいく。

直後、天野は回転しながら宙を舞い、何の抵抗もなしに雨で濡れたアスファルトの上へと全身が叩きつけられた。

全身全霊の殴りを受けた天野はそのまま立ち上がることも出来ず、
気を失ってしまった。

第八章 灰色の先の世界

数多^{あまた}は天野^{あまの}の迷彩服から一つのフラツシユメモリの様な物を取り出す。

このフラツシユメモリの様な物が通行許可証^{トランサー}だ。

いつもは敗者の物を決して取ったりしない彼だが、今回ばかりはそんな事は言ってられない。

苦しそくにギョツと目を瞑って倒れている少女。

きっと彼女は体内でウイルスコードと戦っているに違いない。

そして、彼女の戦いを止めるためにはアンインストールプログラムが必要だ。

「絶対にお前を助けるからな。助かったら何でも教えるし、どこへでも連れて行ってやる。だから……」

数多は眠ったままの少女に視線を向け、奥歯を力一杯噛み締めてから、

「絶対に死ぬなゼロ!!」

返ってこない返事に虚しさを感じ、雨の音が余計に耳につく。

数多はそれ以上何も言わず、彼女の体を負ぶって、天野から拝借した通行許可証^{トランサー}にあるボタンを押す。

通行許可証の使い方は走っている時、ゼロから教えてもらった。もしかしたら、彼女はこうなる事を予想していたのかもしれない。そう思うと、数多の心は痛み、自分の無力さをとことん感じてしまふ。

だから彼は決心した。

例えこの身が果てようとも彼女を救い出そうと。

トランサー
通行許可証からは立体映像で移動場所や移動後の時間について表示されている。

彼は移動場所を黒田研究所に定め、もう一度ボタンを押す。すると、数多とゼロの体は閃光に包まれ、瞬間、二人はその場から消失した。

時空移動にはそこまで時間がかからなかった。

ものの数秒で移動は終わり、数多は未来の地を踏む。すっかり暗くなっている空には金色の月が輝いていた。

「な、何だよ……これ」

しかし、目の前の風景を見て、彼は驚愕する。

黒田研究所はそうやら町の中にあつたようだったが、彼にはそこが本当に町なのか判断できない。

立ち並んでいるビルはほとんどが廃墟と化しており、窓ガラスは割れ、ヒビが入っているものまでもあった。

道路は舗装されず、地震が起きた後の様に挟れて地面が剥き出しになっている。信号にいたっては光るところかそのほとんどがひん曲がっている。

まさに生き地獄、逆境だと彼は痛感する。

こんな土地に人間はいるのかどうか、それすら分からない。

そんな事を考えていると、どこからか銃声が響き、その音が少しずつ数多のいる場所へ近づいていた。

彼はゼロの話を思い出す。

この世界ではギャングの抗争多発している。と彼女は言っていた。確かにこんな無法地帯の様な場所でそんな事が起こっても、余り違和感を感じない。むしろそちらの方が合っている様な感じさえしてくる。

「とりあえず抗争に巻き込まれるのは真っ平ゴメンだ。隠れ場所は……」

数多は町の風景から目を逸らし、振り返ると、そこには三階建ての小さなビルがあった。

ビルの窓ガラスはほぼ割れており、入口には赤外線のパリケードが張られ、侵入禁止と白い文字が点滅している。

ビルの表札には黒田情報制御研究機関と記されていた。

ゼロの生まれた場所であり、全ての始まりの場所。

そして、この戦いの終結の場所でもある。

「さて……どこから侵入しようか」

おそらく正面から入る事は不可能だろう。

元々、この赤外線は侵入者防止のために張られた物だ。こんな物を真正面から潜るのはほとんど自滅に等しい。

次に彼は窓からの侵入を考えるが、凝視してみると透明な膜の様な物が張られている。

「何だコレ……」

試しに数多はアスファルトの破片を手に取り、その膜へ向けて破片を投げる。

すると、破片は倍速となって数多の下へと返ってくる。

「あつぶね!？」

数多は瞬時に見極め、凶器と化したアスファルトの破片を避ける。破片は勢いを衰えず、挟れた道路を越え、反対側のビルに穴を空けた。

もし数多の動体視力が並の人間程度だったら、彼の額には風穴が空いていただろう。

「防止というより、撃退つてところだな。つくづく物騒な世の中だぜ」

数多は肩の力を抜き、溜息を吐く。

しかし、これでは侵入出来ず、最悪の場合抗争に巻き込まれてしまう。それに、何よりここを突破しなければアンインストールプログラムを手にする事が出来ない。

「こつなつたら正面突破だ!!」

ゼロだって自分を犠牲にして助けてくれたんだ。これくらい出来なくてどうする!

数多は心の中で叫び、赤外線の張り巡らされた入口へと体を突っ込む。

瞬間、赤外線バリケードはビュバという電子音と共に数多の目の前から消えてしまった。

「あ……れ？」

思わず声が漏れ、彼はもう一度入口に視線を向ける。

ビルの入口には再び赤外線バリケードが張られている。

トランザ
通行許可証には様々なパスを登録する事が可能であり、時空移動のパスから遊園地の入園パスまでもがこれ一つに記録出来る。

数多の持つている通行許可証は元々天野の物であり、その中に捜査許可のパスが入っていたため侵入する事が出来たのだが、その事を彼は知らない。

「ま、まあいいや。侵入出来たんだし」

ともあれ、結果は結果だ、と彼は強引に結論付けて天野から拝借したライトを点け、周囲を模索する。

一階はエントランスとなっており、受付があるところを見ると、研究所というより民間の会社の様にさえ見えてくる。

数多はぐりとエントランスを回り、エレベーターとエスカレーターと建物の案内図がある事を発見する。だが、なぜか非常階段だけは見つからなかった。

エスカレーターは電力がストップしており階段と変わらず、エレベーターに至ってはその扉すら開かないだろう。

更にこの建物は地上より地下の方がフロアが多く、地上三階に対して地下は一〇階もある。

こんな場所で仕事をしていたら太陽光が恋しくなるだろうな、と数多は思っただけ再び案内図に目をやる。

地上三階、地下五階までには各フロアの詳細が示されているが、地下六階から一〇階は空白となっている。

つまり、その間のフロアで余り表に出したくない研究が行われていたに違いないと数多は予想する。

「片っ端から探すしかないのか……」

しかし、五つの広大なフロアを一人で搜索するとなると骨が折れそうだ。

だが、自分の身を削る覚悟が彼にはあった。

数多は動かないエスカレーターへと踏み出し、地下へと下って行く。

案内図に詳細が示されていた地下五階までのフロアはひたすら無視していき、詳細のない地下六階に到達すると彼はその場に踏み止まる。

「さて、搜索開始だな」

ゼロが背中から落ちそうになったので、数多は抱え直し、ひたすらフロアを歩いて回る。

六階、七階、八階と見ていくが、アンインストールプログラムと思われる物はどこにもない。ある物と言ったら、液晶の割れたコンピュータや作りかけの基盤、更には薬莢や小型の拳銃などの研究所に相応しくない物までも存在していた。

激戦の爪痕が生々しく残り、壁には弾丸が埋め込まれ、赤い染みが所々に残っている。

「残酷……だな」

数多はライトを壁から逸らし、次に進む暗闇の空間を照らす。

地下九階、そこへ続くエスカレーターには今までに見た事がない程の薬莢が溢れていた。

おそらく、この先こそがこの研究所の『本当の闇』の部分なのだろう。激戦をしてまで秘密を守り、そうして撃沈していった血みどろの世界。

そんな中を彼は薬莢の大群を足で退かせながら進んでいく。

暗闇の世界は果てしなく暗黒で、何となく冷たい感触が数多の肌に触れた。

第九章 もう一人の隊長（1）

動かないエスカレーターを下った数多は、あまたライト照らし、左右以外に上下も確認する。

地下九階は他のフロアと違い、研究室が一室しかない。しかも扉の横にあるタグには資料書庫と記されていた。

書庫の入口前の壁には大量の血液が付着しており、どこかホラーゲームを連想させる。

多分、ここで研究者達は自分達の成果を記した資料を命がけで守るため死守しようとしたが、あえなく鎮圧されたのだらうと数多は予想してみる。

つまり、それだけの価値の物がここにはあるのだらう。

ガシヤリと数多は動かない自動扉を強引に開け、侵入を試みる。

室内には大量の棚が並んでおり、そこには本やメモリなどの様々な記憶媒体が陳列していた。

「これは……多過ぎだろ」

流石の量に数多は啞然とする。

この中からたった一つのアンインストールプログラムを探す事はまず不可能だ。そんな事していると何百年と掛かってしまう。

仕方なく、数多はこのフロアを後回しにし、書庫を出ようとする
と、

無理矢理開けたはずの動かない自動扉が勝手に閉まっていた。

数多はすぐに察し、振り返る。

この部屋には自分以外に誰かがいる。しかも、姿を隠すところ考
えると相手はおそらく味方ではなく敵だろう。

安易にライトを点けると居場所が相手にばれてしまうため、数多
はライトを消す。

暗闇の中に紛れ、数多は棚の陰に隠れる。

相手が何者なのか全く情報が無いため、数多は出方を窺う。

するとどこからか靴が床を叩く音が聞こえてくる。それは、一つ
一つゆっくり一定のリズムを刻んでいる。

相手は一人だけだと数多は確信し、背負っていたゼロを床に寝か
せる。

敵の狙いはおそらくゼロだろう。そのため彼女がいる場所では戦
えない。

数多は足音をたてないようにして歩き、手探りで棚や壁を避けて
いく。

その間にも、自分以外の足音が書庫に響く。その音に迷いは見当
たらない。

（相手は……見えてるって事か。さすがにこのままでは勝ち目は無
いな）

目隠しをした人と何もしていない人、喧嘩をしたらどちらが勝て
るでしょうと質問されている様なものだ。

答えは勿論、勝てるはずがない。

いくらデタラメに攻撃をしたところで正確な攻撃には勝てはしな
い。それは数多が一番分かっている事だった。

どうせ相手には見えているのならば、数多はライトのスイッチに
手を掛けたところで、

手に凄まじい衝撃が走り、ライトは数多の手を離れ落下した。

「いつてえ……」

ビリビリと伝わる手の痛みを堪え、床に落ちているライトを見る。ライトは無残にも砕けて、とても使える物ではなくなった。

「これであなたの視界は遮りました。大人しく降伏するならば命までは奪いません」

足音と同時に聞こえてきたのはミルキーな女性の声だった。その声からは過剰な敵意を感じない。むしろ、敵対を拒否する様な意志さえも感じる。

「アンタもアジェスタとかいう所の一員か」

数多は姿の见えない相手に問いかける。
すると、書庫に響いていた足音は突如止み、

「よく分かりましたね。いや、むしろ分からない方がおかしいのでしょうか？」

穏やかな声は書庫を反響して、数多の耳に届く。

「確かにわたしはアジェスタの一員ですが、第一部隊の者ではありません」

瞬間、バチンという何かが弾ける音と共に書庫の電灯一斉に点灯した。

「うわっ……！」

急に明るくなった事により、先程まで暗がりになっていた数多の目は眩む。

数秒してからようやく視界が正常になり始め、数多は先程の声の人物を目にする。

闇夜の如く漆黒の髪は腰の所まで流れており、頭にはゴツイ視覚補正ゴーグルを着けている。黒のデニム生地ジャケットの下には対照の色である白のシャツを着ており、黒のジーンズはどこか古めかしさを感じる。

「はじめまして、わたしはアジエスタ第二部隊の隊長、紅坂柚月こうさか ゆづきと申します」

紅坂は手に持っていた拳銃をベルトに着いているホルダーに直し、懇切丁寧に挨拶をする。

第九章 もう一人の隊長（2）

「第二部隊……隊長」

数多^{あまた}は奥歯を噛み締める。

ほんの数分前にもう一人の隊長と戦い、激戦を交えたというのに。

「報告は受けています。天野君を倒すとは……素人とは思えない強さですね」

「そりゃどうも」

二人の声は広い書庫に響き渡る。

「それより……折角ライトを壊して俺の視界を遮ったのに、なんで電灯を点けたんだ」

「礼儀です」

紅坂^{こうさか}は凜とした表情で即答し、

「挨拶をする際は相手の顔を見る。これは最低限の礼儀です」
「……」

予想外の理由に一瞬呆然となった数多だが、すぐに気を取り直す。

「それで……アンタもゼロを狙ってるんだろ？」

「いえ、わたしの目的はゼロではありません」

「えっ？」

愕然となる数多に対し、紅坂は眉一つ動かさずに続ける。

「わたしの目的は数多^{かける}翔君、あなたです」

「……俺!？」

あまりにも意外な返答に、思わず大声をあげる。

「えっ?で、でもアジェスタってのはゼロを捕まえるために……」

「ウイルスコードに関してはわたし達第二部隊はあまり関与していません。本部ではわたし達は待機状態となっています」

しかし、と紅坂は表情を引き締め、

「わたしが遥々ここまで来てあなたと会おうとした理由は、アンインストールプログラムについてです」

「アンインストール……プログラム」

ゼロの体に潜むウイルスコードを唯一排除する事が出来る魔法の様なプログラム。そして、今数多が一番欲している物だった。

「でも、アンタ確かゼロについては関与していないって……」

「関与はしていません。天野君が血眼になりながら調べていたので、興味本位で独自に調べていたのです」

「な、なるほど……」

思わず数多は紅坂の努力に感心してしまう。

「話は逸れましたが、わたしが掴んだ情報によるとアンインストール

ルプログラムはこの施設内にあるようです。勿論、あなたもそれを知ってここに来たのでしょうか」

「あ、ああ……」

「しかし、どこにそれがあるのか分からない、違いますか？」

「うっ……そ、そうだ」

紅坂の鋭い読みに、数多は少々動揺する。

「わたしはプログラムの在り処を知っています。もし、あなたが死ぬ気でその子を助け出すというなら案内しましょう」

「死ぬ気……か、こつちとら最初っからその気でここまで来てんだよ。嘗めてもらっちゃあ困るぜ」

数多は薄く笑い、しかしそれとは対照的に拳を力強く握っていた。

「そうですね……では案内する前に一つあなたに教えておかなければならない事があります」

紅坂は人差し指だけを立てて、

「実はアンインストールプログラムには使用者の適性がある様なんです。その一つがまず度胸です。先程部屋を暗くしてライトを破壊したのはそれを確かめるためです」

軽率な真似をしてしまつてすみませんと彼女は数多に謝罪する。

「いや、別にいいんだが……それで、他にも条件はあるのか？」

「あります」

紅坂は即答して、

「あと二つあるのですが。一つは強さです。ある程度の強さを持っていないといけません、あなたは天野君を倒した実力があるのでおそらく大丈夫でしょう」
「強さ……か」

アンインストール中に何かと戦うのだろうか、数多は安易に考える。

しかし、その間にも紅坂は続け、

「そして最後の適性条件が……視力です」

「視力!?!」

「はい、何でも見切る事が可能な動体視力が必要です。そして、これに適当なのが数多君、キミだけなんです」

「俺が……」

数多の手が自然と震え、気持ちが高ぶる。

親に捨てられる原因となり、今まで恨めしく思っていた視力が人を助けるために役立つ。

しかも、守りたい人のためなのだからなおさらだ。

「その子を助けられるのはあなただけです数多君。今なら退いて日常に帰る事も可能ですが、どうしますか？」

「……退く理由が見当たらねえな」

数多はそれ以上何も言わず、紅坂もこれ以上はくどく質問しようとはしない。

「そうですか……では」

紅坂は振り返り際に言い放つ。

「アンインストールプログラムのところまでわたしがご案内いたします」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0523r/>

CORD 0

2011年3月1日23時17分発行